

専修寺蔵『四十八誓願』建長八年真佛写本の朱訓点について

佐々木 勇

一、本稿の目的

専修寺蔵建長八年写『四十八誓願』は、本文・訓点とも、高田派二世真佛（一二〇九—一二五八あるいは一二六一）の書写になると考えられている。^①その全容は、『影印高田古典』第一卷（真宗高田派教学院、一九九六年）に収められた写真によって知ることができる。

本資料には、次の奥書が有る。

建長八歳丙辰四月十三日書之

これによつて、建長八年（一二五六）真佛四十八歳、親鸞八十四歳時の書写本であることが知られる。

本資料において、日本語の歴史上特に注目されるのは、その朱声点である。

本資料には、「●」「ー」「○」の四種の声点加点がされている。ただし、「●」「ー」「○」の声点は、入声にのみ用いられる。^②

この形式の声点は、親鸞の写本と、親鸞の弟・従弟の加点本以外に、加点例が無い。^③

本資料の声点は、後に述べるごとく、親鸞の声点と、形まで等しい。よって、親鸞自身による加点である可能性が存する。そこで、本資料朱点が親鸞自筆加点か否かを、声点の内容と形式とによって確認することが、本稿の目的である。

二、本資料の訓点

1. 墨点

本資料の墨筆訓点は、仮名と返点とである。墨筆による声点加点例は無い。

2. 朱点

本資料の朱点は、声点と句切り点とを加点する。

朱声点は、墨筆訓点が訓読している漢字にも加点されていることから、墨点の訓読とは無関係に、経文を音読した際の字音声調を記していることが知られる。

朱の句切り点は、六ウ三行目の第二十二願から十一オ二行目の第三十二願に限り、加点されている。

この句切り点は、四字一句を基本とする字音直読の句切りを示し、墨点訓読の切れ目とは一致しない場合も多い。

なお、墨点に重ねて朱点を加点している箇所が存するため、墨筆による訓読点加点の後、音読の声調を示す声点を朱で加点したことが判明する。

三、朱声点の内容と形式

1. 声点の内容

まず、『四十八誓願』の入声点が、親鸞加点の字音直読資料である、西本願寺蔵『觀無量寿經註・阿弥陀經註』經文の入声点と同内容のものか否かを確認する。

A. 入声の「急」と「緩」

① 西本願寺蔵『觀無量寿經註・阿弥陀經註』の入声点

左は、句末か句末以外かを、親鸞加点の句切り点に依って判定し、入声点の延べ数を記した表である。句末以外の例は、後続字の頭音によって、分けた（後続字頭音は、当該字の呉音のそれを探り、本資料当該例の声点によって清濁を判定した。③）。

a 「急」の入声点

| 喉内 | | 唇内 | | 舌内 | | 声点 |
|----|----|----|----|----|----|-----------|
| | | | | | | 下接字 頭音 |
| 濁急 | 清急 | 濁急 | 清急 | 濁急 | 清急 | 無声 |
| 2 | 53 | 19 | 9 | 13 | 24 | |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 9 | 27 | 有声 |
| 0 | 1 | 0 | 0 | 8 | 20 | 句末 |

b 「緩」の入声点

| 喉内 | | 唇内 | | 舌内 | | 声点 |
|----|----|----|----|----|----|-----------|
| | | | | | | 下接字 頭音 |
| 濁緩 | 清緩 | 濁緩 | 清緩 | 濁緩 | 清緩 | 無声 |
| 11 | 36 | 6 | 7 | 0 | 5 | |
| 18 | 37 | 11 | 10 | 0 | 6 | 有声 |
| 28 | 15 | 9 | 8 | 0 | 0 | 句末 |

右のごとく、親鸞自筆『観無量壽経註・阿弥陀経註』における、「急」の声点は、舌内入声字（一・ㄱ、または、無声音が続く促音化の可能性がある入声字に加点されている）。

一方、「緩」の声点は、下接字の頭音にかかわりなく、唇内・喉内入声字（一・ㅍ・ㄷ）に対して加点されている。^④

a 「急」の入声点における例外は、有声音が続き、また、句末でも「急」の声点が加点された、喉内入声字「逼」の一字二例である。

〔逼〕所逼^{入急}云^去何^{上濁}當見（観一三五） 此人苦逼^{入急}（観五九六）

右が「逼」への声点加点例のすべてである。

「逼」は、保延本『法華經單字』鎌倉期点で「ヒツ」、『観智院本類聚名義抄』「和音」でも「ヒチ」と仮名書きされている。図書寮本『文鏡秘府論』保延点、興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』院政期点にも「ヒツ」の加点が見られ、当時、日本漢字音では、舌内入声字として扱われている。親鸞遺文にも、「逼^{入急}惱^{入急}」（『教行信証』三15）・「逼隘^{入急}」（『浄土論註』上29）などの、入声音を子と書いた例が有る。そのため、本資料でも、舌内入声字相当の「急」入声点が加点されたもの、と考えられる。

b 「緩」の入声点における例外は、舌内入声字でありながら「緩」の声点が加点された、次の十一例である。

〔二〕一^{入緩}一^{入緩}二^{入緩}例^{入緩} 一^{入緩}觀^{入緩} 第十一^{入緩}觀^{入緩} 一^{入緩}日^{入緩} 佛^{入急}説^{入急}無^去量^平壽^{平濁}觀^平經^{入緩}一^{入緩}卷^平

〔目〕日^{入緩}日^{入緩} 日^{入緩}没^{入急}

〔七〕第七^{入緩}觀^{入緩} 經七^{入急}七^{入緩}日^{入緩}

〔八〕第八^{入緩}觀^{入緩}（平）

右のうち、「一・日」は、坂東本『教行信証』においても「緩」の声点加点例が見られる。

〔二〕一^{入緩}時^上 一^{入緩}異^平 一^{入緩}之言^{上濁} 第一^{入緩} 一^{入緩}日^{入緩} 一^{入緩}百^{入緩}五^{上濁}十^{入緩}年

〔日〕 日〔入緩〕 一〔入緩〕 日〔入緩〕 今〔去日〕 〔入緩〕

当時、右のような語の中では、これらの舌内入声字が開音節化して発音されることが有ったもの、と考えられる。

② 専修寺蔵『四十八誓願』の入声点

右と同様に、専修寺蔵『四十八誓願』真佛写本の入声点を整理した結果を数表にする。

a 「急」^{キウ}の入声点

| 喉内 | | 唇内 | | 舌内 | | 声点 下接字 頭音 |
|----|----|----|----|----|----|-----------------|
| | | | | | | |
| 濁急 | 清急 | 濁急 | 清急 | 濁急 | 清急 | 無声 |
| 1 | 3 | 2 | 0 | 0 | 7 | |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 有声 |
| 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 句末 |

b 「緩」^{ユル}の入声点

| 喉内 | | 唇内 | | 舌内 | | 声点 下接字 頭音 |
|----|----|----|----|----|----|-----------------|
| | | | | | | |
| 濁緩 | 清緩 | 濁緩 | 清緩 | 濁緩 | 清緩 | 無声 |
| 3 | 13 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 0 | 3 | 3 | 3 | 0 | 0 | 有声 |
| 4 | 6 | 4 | 2 | 0 | 0 | 句末 |

右の通り、専修寺蔵『四十八誓願』には、「急」「緩」の声点对応原則から外れる例が皆無である。

本資料は、全体の加点例がわずかであるものの、同じく真佛加點『入出二門偈頌』建長八年写本に親鸞自筆本と異なる例が少なからず存するの^⑤と比べ、本資料の声点加點は正確である。

これは、親鸞加点点を真佛が移点したのではなく、親鸞が直接加点了たためではないか、と考えられてくる。

B. 一音節去声字の上声化率

本稿の筆者は、かつて、院政期から鎌倉時代にかけて進行した一音節去声字の上声化について調べ、報告したことがある。院政末期から鎌倉中期にかけての字音直読資料では、次のような数値であった。左は、句頭の例に限った場合の、一音節去声字への去声点・上声点の加点数である。

| | 去声点 | 上声点 | 上声化率 |
|------------------------------------|-----|-----|----------|
| ① 聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華經』院政末期・鎌倉極初期点 | 81 | 4 | (4.7%) |
| ② 親鸞筆『阿弥陀經註・觀無量壽經註』一二〇一〜一二〇六年頃点 | 132 | 6 | (4.3%) |
| ③ 龍門文庫蔵『阿弥陀經・觀無量壽經』鎌倉後期点(祖点は鎌倉初期) | 57 | 20 | (26.0%) |
| ④ 東京大学国語研究室蔵『大般若波羅蜜多經』建長六年(一二五四)頃点 | 7 | 37 | (84.1%) |
| ⑤ 天理図書館蔵『成唯識論』卷第五弘長三年(一二八三)頃点 | 0 | 407 | (100.0%) |

④ 建長六年(一二五四)点には、かつて去声点が加点了されていた一音節字に、上声点が加点了される例の方が多い。ところが、その二年後、建長八歳(一二五〇)の書写奥書が存する本資料『四十八誓願』朱点には、次のとおり、去声点が多い。

| 專修寺蔵『四十八誓願』朱点 | 去声点 | 上声点 | 上声化率 |
|---------------|-----|-----|---------|
| | 18 | 2 | (10.0%) |

これも全体例が少ないものの、鎌倉中期の実態とは異なる。それは、院政期に言語形成期を過ごし、建長八年に八十四歳であつた親鸞が加点したか、親鸞加点本を忠実に移点したためであろう。

右のどちらであるかは、判定が難しい。それは、浄土真宗における宗祖親鸞加点本の移点が極めて正確なためである。たとえば、正平六年（一三五一）写存覚筆『浄土三部経』の『阿弥陀経』『観無量壽経』声点は、西本願寺蔵親鸞自筆

加点本の鎌倉時代極初期の声点をそのまま写したものである。また、その『無量壽経』上下二巻も、龍谷大学蔵『無量壽経』南北朝朱声点の声点とほぼ完全に一致する。これらも、親鸞が認めた声点をそっくり移点したものと考えられる。^⑥この両『無量壽経』の一音節去声字の上声化率を算出してみると、左の通りである。^⑦

| | | 去声点 | | 上声点 | | 上声化率 | |
|--------------------------|--|-----|--|-----|--|---------|--|
| | | 109 | | 108 | | 109 | |
| ⑥ 西本願寺蔵『無量壽経』正平六年写本（上巻） | | | | | | 8 | |
| | | | | | | (6.8%) | |
| ⑦ 同右 | | | | | | | |
| | | | | | | 18 | |
| | | | | | | (14.3%) | |
| ⑧ 龍谷大学蔵『無量壽経』南北朝期朱声点（上巻） | | | | | | 8 | |
| | | | | | | (6.9%) | |
| ⑨ 同右 | | | | | | | |
| | | | | | | 18 | |
| | | | | | | (14.2%) | |

これは、正平六年（一三五一）あるいは南北朝期における上声化の状態ではない。この両『無量壽経』に加点された声点は、鎌倉時代極初期の状態に一致する。

両本とも、上声点が加点された句頭一音節字は、上巻で「諸・那・不・无・衣」、下巻で「不・父・威・於・修・牛・世・著・數・歸」である。下巻で上声化率が高いのは、決まって上声点が加点される漢字が下巻に多く出現するためである。

一方、専修寺蔵『四十八誓願』朱点において、句頭一音節字上声点加点字は、「諸・那」各一例（「諸」所欲求）（八才

3)・「那上」羅上延(平身平)者(平濁)」「(ハウ3)」であり、右の『無量壽經』二点における上声点加點字と完全に一致する。^⑧

C. 『無量壽經』声点加點本との比較

專修寺藏『四十八誓願』の声点が親鸞自筆であれば、親鸞自筆『四十八誓願』の声点と一致するはずである。

そこで、両者の声点を比較したい。ところが、親鸞自筆『四十八願文』は断簡しか残存しない上、現存断簡には、声点が加點されていない。^⑨

親鸞聖人全集刊行会編『定本親鸞聖人全集』第二卷(一九六九年、法藏館)の解説は、『四十八願文』と断簡として残る『九願文』とを比較して、「前者はいわば自分の手許におく手控えのようなものと考えられ、後者は宗義の根拠となる九願文を提示して、願意に準ずる読み方を示し、その要旨を的示するから、化他的なものと解される。」としている。

「手控え」には入声の急・緩を区別する字音直読の声点を加點し、「化他的なもの」には声点を加點していない点も、親鸞自筆本の実態と等しい。

親鸞自筆本『四十八誓願』声点との比較が不可能であるため、右の『無量壽經』声点と比較する。『四十八誓願』は、『無量壽經』から抜粋したものであるから、專修寺藏『四十八誓願』の声点が親鸞自筆であれば、親鸞加點声点を反映した右の『無量壽經』声点と一致するはずである。

以下、專修寺藏『四十八誓願』と西本願寺藏存覺筆『無量壽經』正平六年点の声点を比較してみる。
両資料とも、比較の加點が多い誓願を掲げると、左の通りである。

〔第二願〕

『四十八誓願』…設我得佛・國中人天(上濁)・壽(平濁)終(去濁)之後・復(平濁)更(去三)惡道者・不取正覺
『無量壽經』…設我得佛・國中人天(上濁)・壽(平濁)終(去濁)之後・復(平濁)更(去三)惡道者・不取正覺

〔第三願〕

『四十八誓願』…設我得佛・國中人天・不悉^(入急)眞^(去)金^(上濁)色^(入濁)者^(平)・不取正覺・
『無量壽經』…設我得佛・國中人天・不悉 眞^(去)金^(上濁)色^(入濁)者^(平)・不取正覺・

〔第四願〕

『四十八誓願』…設我得佛・國中人天・形^(去濁)色^(入緩)不^(上)同^(上濁)・有好^(平)醜^(平)者・不取正覺・
『無量壽經』…設我得佛・國中人天・形^(去濁)色^(入緩)不^(上)同^(上濁)・有好^(平)醜^(平)者・不取正覺・

〔第五願〕

『四十八誓願』…設我得佛・國中人天 不識^(入緩)宿^(平)命 下至^(上)不知^(上)百千億那由他・諸劫^(入緩)事^(平濁)者・
不取正覺・

『無量壽經』…設我得佛・國中人天^(上濁)・不識^(入緩)宿^(入緩)命^(平)・下至不^(上)知^(上)百千億那由他・諸劫^(入緩)事^(平濁)者・
不取正覺・

〔第十願〕

專修寺藏『四十八誓願』…設我得佛・國中人天・若^(入急)起想^(平)念^(平)・貪^(去)計^(平)身^(去)者^(平濁)・不取正覺
存覺筆『無量壽經』…設我得佛・國中人天・若 起想^(平)念^(平)・貪^(去)計^(平)身^(去)者^(平)・不取^(平)正覺・

〔第十四願〕

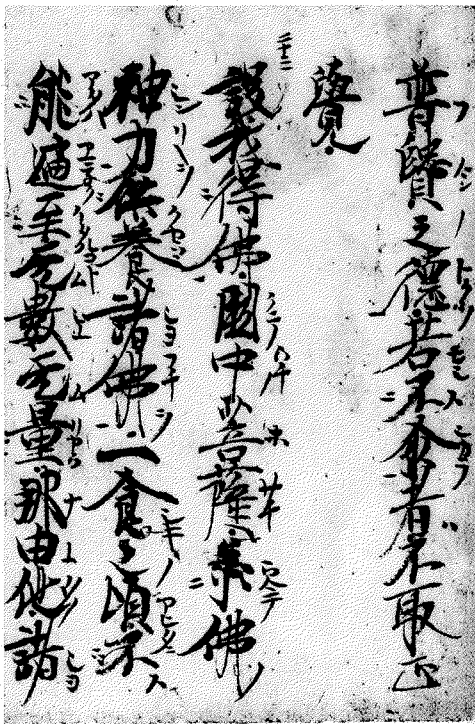
『四十八誓願』…設我得佛 國中聲聞有能計^(平)量 下至三千大千世界 聲聞緣覺 於百千劫^(入濁) 悉共^(平濁)計^(平)按^(去)
知^(去)其^(上濁)數者不取正覺

『無量壽經』…設我得佛・國中聲聞有能計^(平)量 下至三千大千世界・聲聞緣覺・於百千劫^(入濁)・悉共^(平濁)計^(平)按^(去)・
知^(去)其 數者・不取正覺

両本、少差は存するものの、加点箇所・加点内容が基本的に一致している。右に掲出を省略した四十二の願文についても、同様である。このような一致は、偶然には生じない。

親鸞の声点を正確に留めていると考えられる存覺筆『無量壽經』（および龍谷大学蔵『無量壽經』南北朝期朱声点）と専修寺蔵『四十八誓願』の声点とは、右の如くに一致した。

よって、専修寺蔵『四十八誓願』の声点も、親鸞の声点を正確に伝えるものと考えられる。親鸞自筆加点であるとしても、矛盾は無い。



四十八誓願 真佛写本 専修寺

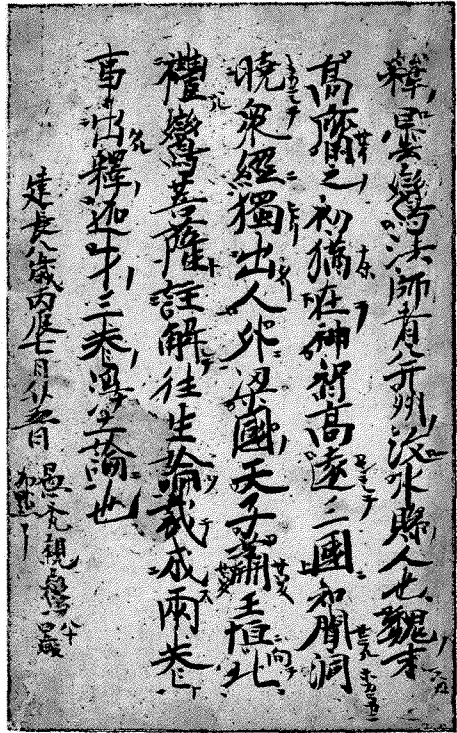
2. 声点の形式

これまでの検討から、専修寺蔵『四十八誓願』声点の内容が、親鸞加点の声点と完全に一致することが知られた。

本項では、声点の形式・形を、親鸞自筆の声点と比較する。

本資料の声点は、「●」「一」「○」の四種であった。平上去声では、「●」を清、「一」を濁として使用している。この四種とも加点されるのは、入声においてである。

入声では、「●」を清急、「一」を濁急、「○」を清緩、「一」を濁緩とする。「急」は舌内入声字



重要文化財 浄土論註 西本願寺 (407頁)

と入声の促音、「緩」は喉内・唇内入声字に加点されていた。これは、親鸞自筆声点図に書き込まれた声点の形式である。^①

その「○」形式の声点では、○は、右斜め下の直線と半円とを併せて、二画で書かれる。これは、『浄土論註』巻末曇鸞伝加点声点に判然と見られる、親鸞の○の書き方である。

一方、真佛の声点は、『皇太子聖德奉讃』(『影印高田古典』第一卷所収)および直弟本『西方指南抄』(『影印高田古典』第五卷・第六卷所収)に加点された墨声点がそれである、と

見られる。真佛は、声点の円を一筆で書いている。^①

よって、専修寺蔵『四十八誓願』の声点は、真佛が移点したのではなく、親鸞の自筆加点なのではないかと思われる。他の声点も、真佛移点『入出二門偈頌』の声点と比較してみる。

本資料の「●」は、小さく、円形である。この点も、親鸞の「●」と等しい。ところが、真佛筆『入出二門偈頌』の「●」は、入筆の穂先を残す水滴形である。これが、真佛の「●」であろう。

さらに、本資料および親鸞自筆の「一」は、全体に細く均一であるか、終画の方が太い。これに対して、真佛筆『入出二門偈頌』の「一」は、入筆部が太い。

以上、声点の形から、本資料声点は親鸞自筆である、と思われる。

四、結 論

右に、専修寺蔵建長八年（一二五六）写『四十八誓願』の朱点が親鸞自筆加点か否かを判断するため、声点の内容と形式とを検討してきた。

その結果、本資料朱点は、親鸞自筆であると判断された。

専修寺蔵国宝本『三帖和讃』は、真佛書写の後、親鸞が朱点を加えたことが明らかになっている。^⑫ 建長八年写『四十八誓願』においても、これと同じ事が行なわれたことになる。建長八年四月に本文が書写された本書への声点加点は、その年のうちになされたであろう。

本稿の検討によって、親鸞八十四歳時の字音直読における声調を記した、親鸞自筆の声点資料が出現したことになる。本資料の朱声点は、親鸞晩年における字音直読の漢字声調を知る資料として、極めて貴重である。

註① 『影印高田古典』第一卷（真宗高田派教学院、一九九六年）所収、中川和則解説。

② 佐々木勇「中世浄土真宗資料に見られる急・緩入声点と舌内入声音」（広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域」第六十卷、二〇一一年十二月）、参照。

③ 詳しくは、佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』の漢字音について」（『比治山大学現代文化学部紀要』創刊号、一九九五年三月）を御覧頂きたい。ここには、『増補 親鸞聖人真蹟集成』第七卷（二〇〇六年、法蔵館）の朱筆によって補訂した結果を、掲げる。

④ この対応原則は、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月）、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」（『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月。後、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）付論第二章に改稿所収）で、坂東本『教行信証』につ

